
部長も僕も嘘つきな小説

しいじい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

部長も僕も嘘つきな小説

【Nコード】

N6770Y

【作者名】

しいじい

【あらすじ】

ピクシブで掲載している小説です。ピクシブの人がこちらの小説を見つけれたりできるのでしょいかね。一応、私の全力ロリババア小説です。

一話（前書き）

こいつは私の趣味前回のロリババアを書きました。そういった特殊なマイノリティが苦手な人は敬遠なさってくださいませ。以上です。一日ずつに更新していこうかと思えます。気長にお付き合いくださったら幸いです。

一話

来年の抱負。

ノーと言える男。

恐らく、無理。

なぜ？

肉体的弱者にして、精神的弱者である僕は何も答えられないからね。いやいや、別に体が弱いとかそういうわけじゃないんだけどね。こう、なんていうのかな必然的にそうなってしまふ理由があるというか、なんというか。

その話は別にしなくていいんだ。だって、ただの言い訳になりそうだし、さらにみじめになりそうだし。だから、しない。

しないったら、しない。いつかするけど。しなきゃいけないけど。今はしない。

それは唐突だった。

新入生は新しい制服にも慣れて、気が緩みだすころの五月の昼下がり。

「いきなりなのだけれど。岩屋君、写真を撮ってきてちょうだい」
週一の部会で、部長から拝命賜った指示は、「川の写真を撮ってこい」とのこと。

「しかし、なんでまた川の写真なんですか？」

正直、体力がない僕としては勘弁願いたいものだ。だって、きついもん。

「川じゃないと、駄目なのよね。空では駄目だし、海なんて論外。というわけで、川の写真を撮ってきてちょうだい」

偉そうに腕組みして、眉を八の字にして、悩む部長。

「答えになってません。そもそも、文芸部なのになぜ写真が必要なの

んですか」

「だまらっしゃい。私が行けと言ったら、黙って行きなさい」

「それと、部長。椅子の上に仁王立ちするのはやめてください。後から掃除するのは僕なんです」

ああ、情景描写が足りないなあ。簡潔にいこう。簡潔に。僕。部長。部室。二人つきり。故に部員は二人。悲しいかな。僕は彼女の舎弟。僕と部長は長机を挟んで対面する形。僕は椅子に腰かけている。部長は椅子の上で仁王立ち。しかし、小さい。何とも悲しくなるほどに小さい。胸も小さいし、背も小さい。しかし、それが良い。注意書き、僕は変態ではないです。

「ほう、岩屋君。私が常々気にしていることをそんな風に言っちゃうんだ？ 私傷ついたわあ。人の身体的特徴をそんな風に言っちゃうなんて」

「僕はなにも言ってますんよ」

「きみの視線が物語っているのよ」

部長の視線が冷たい。しかし、謝ったりしたら、さらに怒るから何も言わない。

僕は挨拶もそこそこにして、部室を後にした。

一話（後書き）

学生時代のうらぶれた気持ち私が私の作品の原動力でございます。

二話（前書き）

この更新は予定更新をしています。初めての機能なので、ちょっとドキドキです。

二話

いきなりの回想。

四月一日。

入学式前の登校日。皆が皆互いの様子を伺う教室の空気。新学期に向けての期待と不安で胸いっぱい。僕は不安で胸一杯。

教師が何か注意事項を話して、「以上です」との言葉で、締めくくった。すると、皆がバラバラに歩き出して、どこかへ向かい始めた。

僕は教師の話を全然聞いていなかったで、この後の動きがまるでわからずにただ皆が歩く方へと付いて行った。なんと立派な協調性だろうか。我ながら辟易する。

皆が行きついたのは、体育館だった。周りの同学年達の聞こえてくる話し声から察するに、今から、部活紹介が行われるらしい。

誰とも、話すことなく部活紹介の時間がくるまで、静かにしていた。だって、初対面の人と話すのは恥ずかしいので。

一つの部活あたり、与えられた時間は五分。

その五分の間に各部活は様々な趣向を凝らしていた。部活によっては真面目な紹介もあれば、笑いを取りに行く部活。

見事にスベった部活。笑いによって場を和やかにしてくれた部活。この後から、各々興味のある部活を見に行くというわけらしい。

運動部の紹介が終わり、次は文化部となった。

文化部というと、やはり、おとなしい人が多いのか、運動部ほどの活発な部活紹介はあまり見られない。

問題はここだ。

文芸部の部活紹介が始まった。

マイクを持って、一人の少女が新入生の前に出た。

皆、ぎよっとした様子で少女を見つめた。

高校生にふさわしくない容姿。

道に外れた格好をしているわけではない。制服は学校指定の紺色
の一品だ。スカートは膝まで隠れているわけだし、何も問題はない
しかし、大きさが問題なのだ。

目測だが、身長は百二十に満たないだろう。ていうか、性格な数字
は知ってるし。だけど、明記はしない。死にたくないからね。命
は大事にしよう。

腰で切りそろえられた黒髪は見た目の年齢に見合わない程の髪
量を誇っていた。

それがまた、見る者を釘付けにする不思議な魅力を持っていた。
僕は咄嗟に顔を伏せた。木を隠すなら森の中とはよく言ったもの
だ。今の僕は完全にその他大勢としてまぎれている。完璧だ。なに
も問題はない。

彼女が周りのざわめきを物ともせず、部活の紹介をこなした。
生徒会の生徒のアナウンスで同級生達は思い思いの部活へと繰り
出していった。

僕は、周囲にまぎれるようにして体育館の外へと向かう。一刻も
早くここを出なければまずい気がした。違う、確信だ。

しかし、僕の予測は甘かった。

彼女はどのようにしてか、僕を見つけた。

僕は捕らえられた。

どこかの刑事ドラマで見た犯人が取り押さえられるシーンを想像
したら間違いはない。言うまでもなく僕が犯人役。たしか、ドラマ
では胸のたわなお姉さんだったから、犯人はムフフな状態だった
けれど。僕にはそんな役得はない。

「偶然とはまさしくこのことだわ。私の右腕とあなたの右腕が
ちりと絡まってしまった。これも何かの縁。さあ、さっそくこの入
部届けにサインをしてもらいましょう」

「お願いします。許して下さい。本当に出来心だったんです。なん
というか、臆病の虫が湧いたんです。壇上に立つその姿を見たとき
にとってもまぶしくてみていられなかったんです」

勿論、真つ赤なウソだい！

「あら、仕方ない。もうほんとに申し訳ない。なんとかしないといけないわ。そのためには、あなたは文芸部に入るしかないわ。さあ、この入部届けにサインをしましょう。これ以上ガチャガチャ言うならお仕置きしちゃうぞ」

黙れ、ばばあ。俺は見た目に騙されない。あなたの年齢を知っている。

「きみ、今なんつった？」

「なにも申しておりません。ええ、決して。この瞳が嘘をつくとお思いですか？」

瞳見えないけどね。

乱暴者は俺をそのまま、文芸部のブースに連れて行って、無理やりサインをさせた。字が歪んでいたのは、僕の心の震えなのか、腕の痛みなのかは定かではない。

二話（後書き）

スタートダッシュがおそいことに定評のある作者でございます。

三話（前書き）

予約掲載で一時間ごとに掲載をするという試験的策略。一話目を知らない人は一話目へゴーです。

三話

以上回想終了。

かくして僕の所属する部活は強引な勧誘によって決定した。後悔はないのか、と問われたら叫んで夕日に向かって走り出したい程に後悔している。だから、自問しない。

それによくよく考えたらあれは部長なりの気遣いだったのかもしれない。部長とは学外においても付き合いのある古い友人なのだ。年下の優柔不断な友人を無理やり引っ張ってでも面倒を見てあげようという優しさなのかも。決して、ただこき使える舎弟がほしいわけじゃなからうよ。

そうだそうだ。今、さらっと言ったけど、僕と部長は付き合いのある友人なのだ。だけど、これもここでは深くは書かない。だって、話が脱線してしまうだろうから。

結局、いつかは書くだろうし。

最寄りのバス停でバスを待つ。学び舎というのは孤高なる立地に立てるのが流行っていたのだろうか。

僕が通う高校では、山の天辺に校舎を構え、交通の不便は限りない。近くの団地に住む者を除いて、多くの者はふもとまで降りなくてはいけない。

歩いて降りて行く者。地域住民の冷たい視線を受け流しつつバスに乗り込む者。様々である。僕は冷たい視線を受けながらバスに乗り込む人間だ。

バス停に並ぶ。

そう言えば、明日から大型連休だ。なのに、僕は友人と遊ぶ予定もなく、部長の指示で川へと向かうのだ。いやおうにも気分が沈む。見てみる。周りの学生のあの明るい顔を。彼ら、彼女らはなんであんなにも晴れやかな顔をしているのだろうか。それは暴君たる部長がいらないからだろう。

この要因はかなり大きいぞ。

ああ、悔しい。ああ、口惜しい。もし、僕が彼女の制止を振り切って、それこそ、華やかな部活へと入部していたら、今の僕はないのかもしれないのに。

可愛いマネージャーがいてほしいです。

僕の汗を拭う優しいマネージャーがいてほしいです。

というか、異性との触れ合いがほしいです。

部長は論外。彼女は……ねえ？ 色々と残念だし。期待はしないのさ。

想像力逞しい僕には文芸部というのは案外性に合っていたのかも
しれない。

部長に感謝感謝。

四話（前書き）

雑談というのはいいものですね。

四話

玄関を開けると見た目十歳程の少女がいた。前かがみになって、靴ひもを結んでいる最中だった。残念ながら胸はない。ほんとに残念だ。

我が姉である。明らかに俺より、若く見えるが姉である。部長と同じ類のものだ。

柔らかかそうなほっぺの持ち主である。すげえ、ひっぱりたい。果物で言うなら、桃みたいな感じ。

「おかえりなさい」

「ただいま。そして、いつてらっしゃい」

「いつてきます。夕飯は何が食べたい？」

「なんでもいいや。適当に美味しいものを」

僕の言葉を聞くと、姉は挨拶もそこそこにマイバックを背負い、歩き出した。マイバックは彼女の体程の大きさはある。小さいものが、大きいものを持っていると、それだけで保護欲が掻き立てられる。

母は家を留守にすることが多い。必然的に家事をこなすのは年長者の姉となっていた。

九年前に高校を卒業した姉は、そのまま家に残り、家事手伝いとしての日々を過ごしていた。

姉が家事を行うようになってから、母が家を空ける頻度は多くなった。恐らく、家にかまわないでよかったからだろうか。

姉は日がな一日中、家事をしているか、パソコンをしているか、読書をしているかの三つに分かれるというインドア派な女性だ。

僕は部屋に戻り、大型連休の課題に手をつけては、その難解さに頭をひねらせて思考のループに陥っていると姉が帰ってきた。

玄関まで行き、姉の背負うバックを受け取る。軟弱な僕の腕では持つことすらままならない重さだ。しかし、ここであきらめては男

が廃る。

「夕飯の催促？ ちょっと待っててね、すぐに作るから」

後ろの方から、僕を追うようにして声が届く。とつとつという軽い音を姉が鳴らす。

「いや、別に夕飯の催促とかいうわけじゃあないんだけど」

「じゃあ、何」

「姉さんはデジカメって持ってたよね。あれ貸して」

「ないこともないけど、探すのが面倒臭いという私の本音は隠すべき？」

「僕に言うのは間違いだったかな。そこを何とかならない？ お問い合わせ」

「しかし、急な話ねえ。なんでまたカメラがほしいのよ」

「部長の指示で写真を撮りに行くんだ。その為に風景の記録用としてカメラを貸してほしい」

「ああ。亜子ちゃんの指示か。しかし、風景を撮るために……気合いで写生して来なさい」

「無理言うな。僕の美術の評定は2なんだぞ。新しい何かが紙の上で生まれてしまいうさだ」

「大丈夫よ。あなたはデキルコッテ私はシンジテルから」

「言葉に力を持たせるなら、片言はよしてくれ。そこまで、僕にカメラを貸したくないのか」

「だって、カメラ探すの面倒だもん」

「あんだと？ 可愛さでごまかせるのかと思ってんのか。このロリバア。」

「ロリババアだなんて、卑猥だわ！」

「そうですか。俺には地の文におけるプライバシーすらも存在しないのですか。」

「大体、あなたは考えていることが顔に出やすいのよね。さっきだって、私が言った。気合いで写生しなさい発言も脳内ではどんな誤字変換が起きているか分かったものじゃないわ」

「……………」

無心だ。考えるな、感じるんだ。落ち着け。深呼吸。

「わかった。僕はカメラを貸してもらえるの？ 貸してもらえないの？」

気合いでバックを冷蔵庫まで運ぶと、床に下ろした。

重量感溢れるバックの沈む音。

しかし、またそれを軽々と持ち上げる小さな手。

「ごめん、こっちだから」と、バックをキッチンの方まで片手で運んでいった。僕の何かが崩れそうになる。

そうだ、彼女はその見た目に似合わずに素晴らしい膂力の持ち主なのだ。

これでは僕が卑屈になってしまうのも仕方ないだろう。背丈は小学四年を迎えるころには、追い抜いたものだが。

こればかりはどうしようもならない。

「さっきのカメラの話だけだねえ。部屋の模様替えを手伝ってもらいましょうか」

そういう小さい姉の様子は、どこか楽しげに見えた。

五話（前書き）

探究心なんてかけらももちませんな

五話

「ほら、はやく」

姉に促されて僕は姉を抱き上げる。

「どう？」

「うん、なかなかいい感じ」

姉は小さい。故に高いところに手が届かない。

そこで、俺の登場。

棚の上の写真箱を持ってきて、蛍光灯を替えて、私を抱っこして、などなど、様々な命令を要求してくる。今まで、何度か部屋の模様変えを手伝ったことがある。その時も散々こき使われた。

今は、姉を抱き上げて、部屋の点検をしていた。「高い視点から周りを見ることは大事なことだわ」とのこと。

やはり、改めて思うが姉は小さい。こんなに軽い身体に一体あのエネルギーはどこに詰まっているのだろうか。

「よし、オーケー。問題なし」

「しかし、ところがどっこい姉ちゃん。まだ問題はあるのだ」

「さあ、なにかしら、まったくもって問題点が浮上しない部屋だけねど」

「肝心のデジカメが見つからない」

「……………」

おいおい、だんまりですか。僕があんたのわき腹を握っていると
いうのはわかってらっしゃるのかい？ これから、超絶笑いの地獄
に落ち込んでやることも可能なんだぞ。

「他に探していない場所のこころあたりはないの？」

「ないこともないけれど……………」

そう、言葉を発する姉は浮かない顔をしている。

僕の周りには隠し事が多くある。隠しごとというのは隠してこそ
のものだろう。しかし、彼女は僕に隠しごとの存在すら隠せていな

い。

この様子だったら、僕に見せたくない場所にあるのかもしれない。なら、僕は一旦退くべきだろう。

「ふん。じゃあ、僕は部屋に戻っとくから後から、カメラを持ってきて」

「うん、ごめん」

そんな風に謝られたら、とても気まずい。別に悪いことはしてないさ。ただ、話したくないことなんてのもあるだろうさ。しかし、僕はそれに関して何も言うことはしない。今までそうだったし。

妙な事情なんて知りたくない。

痛い目に遭いたくない。

僕は姉を床におろして、退出した。うつむいたままの姉の様子がみじめだった。

六話（前書き）

余談ですが。私は乙一の短編の「陽だまりの詩」が好きでした。作中の小説もそういった要素を含んでいます。乙一の作品が苦手な方はご注意ください。

六話

姉の部屋を出て、自分の部屋へと引つ込む。もやもやとした気分
で、愛読書を読み始める。

それはある短編で、製作者を埋葬するために作られたアンドロイ
ドの話だった。

僕がこの話を知るきっかけとなったのは、姉だった。ような気が
する。確か、僕が小学四年生だったか、僕はついに姉の背を追い越
すことができた。そのことを事あるごとに他ならぬ姉に自慢してい
た。

小学四年生というと、姉は高校を卒業したころだ。僕が家から帰
ってくると、姉はいつも本を読んで過ごしていた。見た目は同級生
と変わらない姉の様子を見てみると、ちゃんちゃらおかしく思えた。
生来からの読書好きというのもあったのだろう。しかし、姉はこ
とさらその作者の本を集めていた。母も、その本を集めていたきら
いがある。僕が本を部屋に持ち込み、返さずにいると、母はその本
を紛失したと思い、すぐさま古本屋で同じ本を買い求めてくるのだ
った。

その本が書斎にないという状態が母は落ち着かないらしい。
そして、書斎にはだれも使用していない机があった。長いこと放
置されたままの様な机があった。

これは推測の域を出ないけれど、もしかしたらあの机は父の物な
のかもしれない。

.....

好きな作品というのは何度、読んでも胸を打つものがある。

最期のアンドロイドの主人公と、製作者の語りが物語に緩やか収
束を予感させていく。

最後の見開き一ページ。製作者の謝罪。アンドロイドの否定。生
とは、死とは。

最後の結論。

物語の余韻に浸っていたら、隣室の部屋から重量のある物が落ちる音がした。隣の部屋は姉ちゃんの部屋だ。何かを落したのかもしれない。

万一にも、姉ちゃんには怪我はないだろうけれど、何かアクシデントが起きた時の心細さは限りないものがある。部屋の中で、座り込んだままの姉ちゃんを想像したらいたたまれない。

一旦、部屋を出て、姉ちゃんの部屋をノックする。返事を待つ。返事がない。

万一の事態？ いやいや、かなりまずい。頭でも打ったのかも。姉ちゃん、大丈夫！」

部屋の様子。倒れた椅子。倒れた姉ちゃん。覆いかぶさる本の数々。胸を見ると、上下している。生きてはいるようだ。

山となった本を払いのけて、姉ちゃんをサルベージ。

「何があった？」

「ちよつとばかり転んだわ。もう私は無理。後はよろしく頼んだわ。ガク」

自身で効果音を用意する程度には、元気なようだ。恐らく、高いところにある物を取ろうとして、失敗したのかもしれない。

「怪我はないようなんで、僕は部屋に戻る」

立ち上がるうとする僕を姉が掴む。それが弱々しい握り方なら愛嬌もあるのだろうが、青あざの心配をしなくてはならないほどだ。

「あなたは、この状況を見て、放置するっていうの？ 私はそんな風にあなただを躰けた覚えはないわ」

しかしながら、それこそ妙なものを見つけた日にはたまったものじゃない。

「大丈夫、これらの本を元に戻したらすぐにカメラを用意するから」
「わかった。必ず、カメラの用意を頼むよ」と言っ、部屋の整理をまた始めた。

姉が散らばった本をまとめて僕に渡す。僕をそれを受け取って、

指示通りに本を並べていく。

姉ちゃんが所有している小説、教養書等々。次は雑誌にまぎれて高校時代と、中学時代の卒業アルバムを並べた。

作業すること十分少々、作業はすべて終了して、姉ちゃんが指示した。

「ありがとう、助かったわ。カメラは本棚の上に置いているわ。だけど、決して他の物には触らないでね」

「わかった」

大丈夫さ。僕も僕の部屋にあるプライベートな物を触られたくないしね。

薄型のカメラを受け取り、礼を述べて、部屋を退出しようとした。その時、声が掛かった。

「そう言えば、風景って言えば、どこの写真を撮りに行くの？」

「言ってなかったっけ？ 川の写真を撮りに行くんだよ。場所は指定されてないから、僕に一任されてるみたいだけど……」

僕は言葉を失った。姉の顔がみるみる内に蒼白となったからだ。なにか失言でもあっただろうか。

約二秒間のうちに、ここ一分ほどのやり取りを思い返してみる。特別思いあたることもない。

「……………そう、気をつけてね」

僕は姉ちゃんに部屋を追い立てられるかのような気持で、部屋を後にした。

姉ちゃんの顔を見ることができなかった。

七話（前書き）

ユニークアクセスがあると心がわくわくしてきますね。もしかしたら、私の小説を楽しみにしてくださる方がいるのかと思うと、うれしくて仕方がないです。

七話

ああ、すがすがしき朝。曙光はやさしくさしこみ、瞼を通して刺激を与えてくれる。鳥も鳴き始めようかどうか迷う時間であるようだ。

耳を澄ませば、階下ではせわしなく動いている音が聞こえてくる。姉ちゃんがその小さいからだを最大限に駆使して朝食を作っている様子が思い浮かぶ。

その音を耳にしていたら、このまま再び眠るのは申し訳ない気がする、のそのそと出かける準備をはじめた。昨夜の内に済ませておくのがデキル奴なんだろうけれど、僕はデキナイ奴なんで、これでもいいや。

動きやすいジャージに着替えて、デジカメの動作確認をして、リュックに必要と思われるものを放り込んでいく。

リビングまで行くと、味噌汁と焼き魚、そしてご飯が二人分ずつ盛られていた。

姉ちゃんは腕組みをしていた。傲然とした態度ですべての理不尽に戦いを挑むかの様である。

もしかしたら、もしかしなくても姉ちゃんは僕が降りてくるのを待っていたのかもしれない。

僕が動けないでいると、姉ちゃんは僕に顔を洗ってくるように言った。

僕は言われるがままに顔を洗った。洗顔して幾分明晰になった頭で再び姉ちゃんの様子をうかがう。人とのコミュニケーション能力に乏しい事を自覚している僕ですら、姉ちゃんが不機嫌であるというのがわかる。

対面の席に座り、おごそかな雰囲気で朝食が開始された。今までここまで重々しい空気で食事をしたことがあるだろうか。いや、ない。でましたよ、反語。

今日の味噌汁も美味しい。だとか、魚の焼き加減が絶妙である。だとか、空気を払拭するために会話を試みるが、返事は曖昧なものだった。しまいには、目を伏せてしまった。すげえ、いたたまれない。僕の必死さはなに？

途中からむなしくなったので、何もしやべらない。いっしょに食事を取っているということは思ったほど絶望的な状況じゃないだろうさ。

何も会話をしないものだから、いつもよりも圧倒的に食事を終える。食器を流しにおいた。そのままリュックを背負い家を出ようとすると、声を掛けられた。勿論、姉ちゃんから。

「川に行くの？」

「うん。行ってくる」

「……………やめといた方がいいんじゃないかしら」

「なんで」

「なんでも。もしかして、川でおぼれるかもしれないでしょうが」

……………あの川でおぼれることができる人間がいたら連れて来て欲しい。川と一口に言っても様々なもので、潤沢な水を湛えた豊富な水量の川なんて近所にはない。僕の近所にあるのは、舗装整備されたコンクリートの川だ。晴れの日が続くと目に見えて川の水は目減りするし、雨が降ると驚くほど水量は増す。

そして、ここ最近雨は降っていないから、川とは名ばかりで干上がった通路みたいになっている。

「大丈夫だよ。僕はおぼれないからそんなに心配しなくていいよ。お昼までには帰れると思うから、お昼の用意、よろしく」

「……………わかった」

僕としては、姉がここまで機嫌を損ねる理由が思いつかない。

「そんなに、心配ならいっしょに来る？」

「冗談じゃないわ。私は部屋でこもっている方が性に合っているわ」
今まで、目を伏せていた姉ちゃんが顔を上げる。

今のは禁句だったのだ。と理解した。

七話（後書き）

次の更新は11月21日21時です。一時間ごとに更新いたします。

八話（前書き）

長広舌が大好きなんです。

八話

家を出た時、朝の清涼な空気が僕の肺を満たした。頭がぐちゃぐちゃにしていたので、腹いせに電話してみた。三コールで電話に出た。

『何かしら。何かしら。こんなに朝早い時間にね。私としてはオールナイトでゲームをしていたからこれからおやすみってな感じなわけだけども。もしかして、岩屋君からの川べりデートのお誘いかしら？ だけど、ざ〜んね〜んでした〜。これからの私はなにか大きな用事があるっていうか、出来たっていうか。なんていうか、まあ、そんなわけだから今日は岩屋君に付き合えないのよ。君に誰か誘える女の子がいらないのは重々承知だけだね。本当にごめんなさいね。』

そしてね、何かきみ自身が戸惑うような事態が発生した途端に私に電話をかけるとか、その行動パターンが情けなくも、とても愛おしく見えてしまうのだけれど、そんな風に感じてしまう私の嗜好は隠すべき？ ちよつと、文芸で小説を書く感じで、剽窃してみました。出典は岩屋君の悩みの種で〜す』

「その部長の心は胸の内に秘めるほのかな痛みとして大事にしまつていてください。そして、奇しくも態度ににじみ出るような感じで僕に接してください。そしたら、部長も十分可愛らしくなるでしょう」

『驚いた。岩屋君って変態だったのね』

「黙らっしやい。部長、頼みごとを一つ良いですか？」

『どうぞ？』

「姉の事をよろしくあやしといてください」

『任せときなさい』

電話を切った後、僕は近所の適当なところへと歩き出した。

八話（後書き）

次の更新は一時間後の22時でございます。私の小説は一話一話が短いので、読みやすくあるのではないかと自画自尊しています。ただし、読みにくいと滅多打ちされてます。めげません。頑張ります。

九話（前書き）

強い女の子は好きです。

九話

近所に川がある。名前なんて知らない。だれも知らないだろう。だつて、小さい川だし。昔話とかが残る程に由緒正しき川でもない。住宅街に何かの間違いかのようにしてある川なのだ。川が至るところに在るので、必要にかられて橋も在る。名前とかは調べればわかるのだらうけれど、だれも困らないからいいや。

僕の住む団地は、自然の山であつた所を無理やり切り開いて作られたそう。川を挟んで家々が建てられている。そして、その家の側面には山だ。北側の山は県内でも有数のゴルフ場となつていて、南側の山は新しい土地開発の為に山が削られている。土地がむき出しのままとなつていてから土砂崩れの心配をしているのだけれど、心配だからと言って何ができるわけでもなく、対策は講じていない。以上、優柔不断男の独白でした。

あまりにもな説明口調だから途中で恥ずかしくなつちゃうな。

部長からの指示は川の写真との事だったので、とにかく川の写真を撮りまくればいいのだらうけれど、どうしようか。

僕の体力を考慮するなら、下流の方に行き、町をふらふらしながら川の写真を撮るとするのがベストなのだらうけれど、しかし、それではまずいだらう。

わざわざ、風景としての川の写真を要求するのだから、上流の緑深い風景がほしいのだらう。

どうしようかどうしようか。今、僕の怠惰の心と、勤勉の皮を被つた臆病の虫が争っている。

結局のところ。勤勉の皮が勝利した。我が身が可愛いのだ。筋肉痛。精神的苦痛と肉体的痛み。比べてみたら前者の方がまだ良い。それに、今日は部長に姉の面倒を頼んだのだから、部長の願いことを聞き届けるというのは僕の精神的安寧にも一役買うこととなるだらう。

そもそもの部分で姉の機嫌が悪くなったのは、川に行くことが不機嫌の原因なわけで、川に行かねばならないのは部長の指示なわけで、とどのつまり、部長の所為なのだというのは念頭から外した。

だって、何を言っただとしても返ってくるのは理不尽だけだ。ならば、耐え忍ぼうじゃないか。だって、部長だもん。オマージュしてみました。語尾に「もん」とか付けてみた。可愛いかもしれないな。

九話（後書き）

次の更新は23時です。ついてきてくださる方はいるのでしょうか。

十話（前書き）

みなさんはお姉ちゃんは好きですか？

十話

川沿いに道を進む。舗装された川は落差が二メートルほどある。車が落ちるのを防止するためか、それとも人が落ちるのを防止する為かは定かではないが、白いガードレールがある。

しばらく歩くと、ガードレールがなくなり、川へと降りることが可能な場所がある。本来そこは川へと降りることを目的としたものではないだろう。降りるためには地面を這いずりまわることになる。結果、僕の体は泥だらけになって、心なしか生臭い匂いがするのは気のせいではない。

周囲の大人の中には、子供が川で遊ぶ事を強く咎める人がいた。当時小学生だった僕は怒鳴られることが怖くて、極力川には近付かないようにしていた。

なのに、なんで？

僕は川にいるんだろう？

部長の指示だから？

いや、姉ちゃんが不機嫌になっているのに、それを承知の上で川の写真を撮るだなんてのは本末転倒かもしれない。僕は姉ちゃんに怒られるのが怖くはないのだろうか。いや、そんなことはないだろう。だって、すげえ、怖いし。今だって、後の事を考えてみたら足がぶるぶる震えてるし、胃がきゅっと締めつけられるかの様な感じがしている。ある程度、大きくなった今なら想像がつく。僕の住む県は水難事故が多い。説明すると長いから、短く説明してみる。単語の羅列だけど。

夜景。美しい。坂。多い。重力。ニュートン万歳。水。速い。子供。溺れる。

大体これでわかってくれたかな。わからない人がいたら隣の気になるあの子に訊ねてみてね。

今の話は、恐らく一般論的な部分で考える理由。

そして、姉ちゃんは本当にそれだけで不機嫌になるんだろうか。
ならない。

僕は何も知らない事だらけだ。

いらいらするね。そして、どうしようか悩んでいて、進みたい道も明確なのに、足踏みする僕にもっといらいらするという、もう救いようのないループ。誰か助けて頂戴。

.....

シリアスは慣れない。シリアスなんて僕のガラじゃない。空気の入れ替えをしよう。吸って、吐いて、吸って、吐いて。うん、苔の匂いがする。緑の匂いって表現はあっているのかな？

今、僕はガードレールの無い場所を伝って川へと降りた後だ。

迷うのは辞めた。姉ちゃんに怒られるなら怒られようじゃないか。それは仕方の無いことだ。だけど、僕のことを嫌いになることはないだろう。だってねえ。なんだかんだで、飯作ってくれるほどには優しい人なのだから。

十話（後書き）

次の更新は0時でございます。予約投稿ばんにゃあい！

十一話（前書き）

ここぞというときに気配りができる女性はいいですよね。私はそんな女性とお付き合いしたいですね。女性とお付き合いとかしたことないですが。

十一話

川の水位は三センチとない。幅は三メートル程度である。地面は舗装されているはずなのだが、ところどころ割れていて、地面が見える。

そもそものところで、水がないところもあるので、僕の愛用のトレッキングシューズでも何ら問題はない。

僕は使い慣れないカメラを不格好にシャッターを押した。電子音が鳴ってフレームの風景が制止する。

ひび割れた壁から生い茂る雑草。

橋を下から見上げた写真。

川に差す木漏れ日。

水流で削れた川底。

とにかく、目に付くものはすべてシャッターを押した。押して、押して、押しまくった。僕自身、これはいらないだろう。と思う風景でも写真を撮った。

川の下から見上げる団地は不思議な心地がした。すべて見上げる形。なんだか、位置が変わるだけで、こうも印象が変わるものなのだ。

上流からは水の勢いが増してきて、足をしたたかに濡らした。じくじくと冷たくなっていく足にたまらない不快感。

川底に根を生やしたかのように、足が動かない。先が遠くまで続く川は、僕が抜け出せない洞窟に入り込んだかのような錯覚を与えた。今なら、まだ引き返せる。

妙な反抗心なんて押し殺して、すべて優しいものに包まれていればいいじゃないか。なにも問題はない。なにも変わらない。問題ない……はずだ。

電話のコール。

応答する。

『ああ、私ですよ。私。岩屋君の大好きな亜子ちゃん部長ですよ。嬉しい？ 私が電話をしてきて。すごい嬉しいんでしょ？ と私はうぬぼれてみる。なんで、私が電話をしているのかって言うよね、電話をしなくちゃいけない気がしたのよね。話をつなぐの意味合いでも私の電話は必要に感じたのよ。そして、さらにもっと重大なことがあるの。今ね、岩屋君の家の前にいるの。メリーさんじゃないわよ。まぎれもなく、家の前にいるの。キミから連絡をもらった後、大急ぎでゲームとかバックに詰め込んで、家に向かったのよ。私はとても偉いと思うの。そして、偉いの。しかし、来てみれば何よ。玄関の外にいながら、わかるこの重苦しい空気。何？ もしかして私は歓迎されていないんじゃないの。もう、岩屋君との約束を反故にして、家に帰ってゲームしたいんだけど、帰っていい？』

「却下です」

『だよ。岩屋君もガンバッテ』

「はい」

電話終了。

見えてないけど、部長は笑った気がする。もしかしたら、これは僕の精神状態に起因するかもしれない。

ああ、なんて素晴らしいタイミングで僕に電話をよこしてくれるのだろ。なんて、単純な奴なんだ。僕って奴は。

たまらなく勇気づけられた。

カメラを片手に上流へと進んだ。

十一話（後書き）

今日はこれで終了にございます。お付き合いくださった方ありがとうございました。次の更新は22日18時からの予定です。

十二話（前書き）

実はこの話のモデルは近所の川です。

十二話

橋を三つくぐった。四つ目の橋を遠くに臨む。近づくにつれて、詳細が分かった。橋の上は人が通る事を目的とした通路ではなく、車を通る事を目的とした重厚な作りの橋だった。

ああ、やつちゃったやつちゃった。下から見たらこんなにも迫力があるなんて思わなかった。早まったかもしれないなあ。

橋の下に広がるはトンネルだ。下は水がヒタヒタと満ちている。足を踏み入れたならば、濡れないわけにはいかないだろう。これ以上濡れるのは正直勘弁願いたいものだけど、そんなことにはかまっていられない。

今の僕なら大抵のことには突っ込んでいける。ドン・キホーテ程には勇猛には慣れないが、街中をうるつく不良にカツアゲされそうになっても無謀に応戦してしまいそうなくらいには勇気があるぜ。怖いけど。

頭の中で地図を浮かべる。恐らくだけど、このトンネルの出口は想像が付いている。あそこに出るのだろうなあ。あそこだよ。あそこだ。指示語じゃわかんないだろうけど、僕はわかってるんだよ。だから、いいの。

ここから、三十メートルは離れた位置にある同程度の大きさのトンネルがある。たぶん、そこだ。間違っていたらどうなるかはわからないけど。

奥を見る。ちょっと怖い。しかし、このまま見てたらまた部長から電話が掛かってきてしまうと思い、意を決して中に進んだ。さすがに何度も励ましコールはちょっとばかり恥ずかしい。

十二話（後書き）

次の更新は22日19時です。

十三話（前書き）

ちょっと長いです。不思議な話を目指しています。直視なんてしないんです。

十三話

時季から鑑みても、肌寒いということは想像が付きにくい事態だ。しかし、中は涼しかった。いや、それを通り越して、寒い。体全体が湿り気を帯びているからか……すごい寒い。ちよつと、後悔。勇氣も萎えた。走って逃げたい。後方から入ってくる太陽光が見えなくなった。真つ暗だ。水の反射もあるのだろうけれど、まだ目が慣れてないから実質なものも見えない。このまま、ここにとどまっていたら暗闇による不安で発狂しそうなので前へと進む。

壁に手について、自分の居場所を確認しながらの移動なので、とても時間がかかる。場所の確認もなにも光が少ししか見えないのだから、こんなのは焼け石に水みたいな行為かもしれないが、何もしないよりはいい。

ただ、僕が安心する為だ。

足元を確認する事がかなわないので、深い水たまりに足を突っ込んだ。そのまま体勢を崩してしまうが、カメラを濡らさないように持ち上げた僕を褒めたい。だけど、だれも褒めない。当然。

こんなに暗かったら何も描写できない。困った困った。シフトチェンジ。

視覚ではなく、聴覚と触覚を意識してみる。

左手で、壁に手について、右手にカメラを持ちながら前に進む。時折シャッターのフラッシュを使って内部を確認してみる。歩いた感覚としてもうそろそろ出口についてもいいころだろうが、一向に出口に着く気配がない。道に関しては一本道だったから、迷うはずもない。不安になってきた。もしかして、僕はとんでもない事態に陥っているんじゃないか。

僕の歩く音。凹凸のある壁。音。壁。音。壁。僕の意識がこの二つだけに集約されていった。

異常を感じた。些細なものだったけれど、それは異常だった。

僕は足を止める。音が水の音が止まる。

何かが近づいてくる音がする。僕は動いていない。水を跳ねる音が近づいてくる。まぎれもない、音がする。何かが歩いてくる。僕はどうする？ 逃げるか？ どこに？ パニック。だけど、動けない。

音は近づく。そして、通り過ぎた。

あれか、あれなのか？

あれが、秘密なのか？

秘匿していない秘密なのか。

やばい。まじでやばい。なんだってんだよ。数々の罵倒が僕の中で駆け巡る。その罵倒は僕に向けてだったり、部長にだったり、姉ちゃんにだったり、世の中の理不尽にだったり、なんでもかんでも。とにかく、思いつくものすべて。

思考の渦に巻き込まれていた僕は気付く。

足音が遠ざかっていない。

ああ。詰みだな。僕は死ぬのかもしれない。

今、僕は正体不明の何かに観察されている。僕に興味があるのだろうか。じっと見られている。不思議なものだ。眼球というのは、受容器官であるのに、視線という言葉が存在するように、力を持っている。僕の右半身がちりちりしだした。視線が痛い。

一歩二歩。何かが近づく。

穏やかな呼吸音が聞こえる。ああ、生き物なのだな。幽霊じゃないんだ。安心安心。何かが狂い始めた。僕よ落ち着け、ビークール。湿り気を帯びた何かが、僕の体を触る。顔であったり、胸であったり、腰であったりした。

一体どれくらいの時間そのままであっただろう。

やがて、何かは僕に触るのをやめて、去って行こうとする。

なんで、僕があんなことをしたのかはわからない。触られている

時にその触覚が一種の安らぎをもたらしたのかもしれない。ただ、僕は去っていく方向に向かって、シャッターを押した。フラッシュが焚かれる。残像の形として、何かの後ろ姿は僕の網膜に焼きついた。

一瞬。遠ざかる音が止まった。しかし、何事もなかったかのようにして歩き出した。

僕は助かったみたいだ。

音が完全に聞こえなくなるのを確認するまでは足が動かなかった。何か、電話があるかと思って、携帯を取り出してみた。

圏外だった。

心細くなった。

ここを出るために前進のスピードを速めた。

十三話（後書き）

次の更新は22日20時です。

十四話（前書き）

急な場面展開です。

十四話

家に帰ると、僕を迎えてくれたのはリビングで昼寝する部長だった。姉ちゃんの靴は見当たらなかったのも、どっかに出かけたのかもしれない。

花の女子高生たる部長がこのような無防備な格好で眠るのはいかんせん問題が生じる。別に煽情的であるとかいうわけではない。だらしのないはいけないよね。ということですよ。

起こして、小突きまわしてやろうかと思ったが、紳士的な僕はそんな欲望を抑え込んで、ブランケットを掛けてあげた。漢文で似たような状況があった気がする。この場合。毛布をかけた人間は処刑されたんだっけ？ 死にたくないものだ。

……………結局あの水路での一件の後は早々に退散した。僕はあんな体験をした後に、上流へと上り続けることができる程に豪胆ではない。ネズミもびっくりの肝の小ささだぞ。よく、あの状況で心臓が止まらなかったと心臓を褒める。僕が褒める。偉い偉い。

有給休暇でも与えて、ゆっくり休んでほしいものだが、そうはいかない。休んでもらったら僕が死ぬ。だから、働け。

体中色々な液体で湿っていた。川の水、僕の冷や汗、何かの水。本当に諸々のものだ。

着替えを用意して、シャワーを浴びる。

シャワーを終えた後、部屋にそのまま引っ込もうかと思ったが、曲がりなりにも客人を置き去りにして部屋でくつろぐのは気が引けた。

一旦、部屋に戻りカメラのデータ整理をして、棚から一冊本を取り出して、その後に、またリビングに向かった。部長がソファーに寝転がっているの、対面のソファーで本を読んだ。

数ページ読んだところで、うつらうつらし始めた。

眠気を否定することもないので、僕は安らかにそれを受け入れた。

十四話（後書き）

次の更新は22日21時です。

十五話（前書き）

乱暴な女の子は嫌いじゃないです。わがままな女の子も嫌いじゃないです。まあ、現実世界において触れ合う機会なんてのはほとんどないですがね。　ちよっと今回は長いです。

十五話

頬に鋭い痛みが走る。

目を覚ました。

前方に見えるは、僕に馬乗りな部長。

どうやら僕は起こされたいらしい。先ほどの僕の紳士的行動を読ませてやりたいものだ。

すなわち、彼女は淑女ではないのだろう。

こんな乱暴な起こし方するのは淑女ではない。

僕がはつきりしない頭で抗議した。それは言葉にもなっているか怪しいものだったが、意味は通ったらしい。

「淑女の起こし方とはどんなものよ」

「僕を優しくキスして起こすんです」

「それは、あれよ白雪姫だわ。そして、私が王子様。でも、今のキミなら死んでと言っても疑われない程には顔色が悪いから、言いて妙だわ」

「心臓が止まっていない自分にびっくりしています」

「それは良かった。キミは生きてる。」

それは心底うれしそうな表情で言う。おいおい。惚れちゃいますよ？ 今のエロゲならスチルもんだな。

そんなに心配したのなら、あんな所に行くように指示するんじゃない。と強い批判をしようと思っていたが、その顔を見ていたらそんなことも言えなくなる。

「……………」

僕を見てくる。

「何ですか？ そんな熱っぽい視線で見つめて」

「訊かないの？」

「何を、ですか？」

僕はとぼけた。

重いんだよ。隠しているものが重すぎる。蛇かと思つて尻尾掴んだら、龍だつたみたいなの？

もういい。もういや。今日の僕はオフなんだ。何もしない。とぼけた僕をぼかんとした様子で眺めていた部長。

ふと、悲しげな目をした。

僕はちよつと罪悪感。

しかし、知つたことが今回ばかりは何があつてものみこめないのみこんだら、胃もたれになりそうだ。

「そうだ、写真どうします？　今の時点でそこその枚数ありますよ。データは入りますか」

「そうね、じゃあ、データをもらいましょうか」

そういつて、ポケットからこそこそ取り出したのは黒光りするメタルカラーのUSBだった。

このUSBにデータを入れるとのことだろう。そのUSBを受け取つて、部屋へと向かう。部屋に入つて、扉をすぐに閉める。

「ひぐつ！」

「どうして、部長はさも当然かのごとく僕の部屋へと入ろうとするのですか？」

鼻にぶつかつたらしい。鼻を押さえながら部長は言う。

「私の部屋は私の部屋。キミの部屋は私の部屋」

「どこのジャイアンですか」

「いいじゃない。別にみられて困るものはないんでしょ」

即答できないのがつらいところだ。しかし、ブツは姉ちゃんたちの背ではどんなにガンバツても届くところのありえない高みである。問題はないだろう。

「どうぞ。構いませんよ」

「最初から素直になりなさい。異性を部屋に招き入れるだなんて、オスとしてかなりレベル高い行為だわ」

動物扱いですか。

部長は勝手知つたる我が部屋とでも言うように、デスクトップの

前に鎮座した。

それに関して突っ込みを入れるのも疲れたので、敢えてスルー。デジカメを取り出して、部長に渡す。

デジカメを受け取りながら、面白おかしそうに部長は続ける。

「あら、あらあら？ 私がパソコンをいじっても大丈夫なのかしら。あなたの秘蔵のファイルが私の手によってつまびらかにされていく様をただ見学するというの？ そういう、変態さんなの？」

彼女はどうしても僕を変態にしたいらしい。ここで、いっそ、僕は変態です！ と宣言したらそれはそれで、面白そうなのだけど、やめとく。そのままだ。現状維持。僕よ、落ち着け。

僕の態度が気に食わなかった部長がさらに言葉を重ねる。

「子戸葉ちゃんの証言では、弟が姉モノのゲームをこよなく嗜好しているの、と悩み相談を受けたんだけどなあ。なんで、そんな風に落ち着いているのかな」

ちらちらと僕の様子をうかがう部長。僕はそのようなエロゲ関連の物を持ち合わせていない。高いし。興味はあるけれど。

別に、姉モノに興味があるわけではないんだ。そこは誤解泣きよう。

彼女は僕の涼しい顔が気に食わなかったらしい。頬が膨らむ。ああ。可愛いね。そのままの格好で固まってください。いや、マジで。部長は強硬策にでた。

「ああ、そう？ そうですか。もういいや。悔しいから、今からキミのパソコンに大量のエロゲをインストールしてやる。ちなみにオンラインストールができないように設定もしてあげる。優しい部長からの粹な計らいよ。感謝してね。高かったんだから。タノシンでね。何ですか？ あなたはそこまで、僕を変態にしたいのですか？

いいですよ。いいですよ。了解しました。僕としてもエロゲに興味がないわけでもないもので、願ったりかなったりなだけ。物事はそう上手くいかないものであって、部長が取り出したるは姉モノのエロゲ。タイトルは控えところ。かなり、問題になりそうだから。

畜生。今から、無理にでも事実を工作するつもりか！

あれをインストールさせられた日には、一生日陰物として生きて行かなければならない。日陰物というか、実姉に顔向けできない。畜生、義理のお姉ちゃん設定ならギリギリセーフなのかもしれないなあ。いや、アウトだな。やばい、僕の頭少々疲れてきてる。過労死するかも。頭だけ。

一つ、深呼吸。

椅子に座る部長を後ろから羽交い締めにして、抱きかかえる。本当に残念なことに胸はない。たわわな胸があつたらもみしだいてやるうかとも考えているだろうに。残念だ。

そのままベッドに放る。

部長は可愛らしい叫び声をあげながら、ベッドへと強制ダイブする。

追い打ちをかけることなく、相手の出方を待つ。どんな反撃が起きるかわからない。

待つ。待つ。待つ。

動かない。

いや、ウゴイテイナイ。

まずい。

何が？ いや、こんなネタ前もあつた気がする。おいおい、重複かよ。何やってんだよ。部長さつさと起きてくださいよ。

部長は動かない。僕は動く。とても動揺。息が荒い。息が苦しい。僕の呼吸がうるさい。息を止めてみる。

僕の拍動がうるさい。心臓は止めない。だって、死んじやうし。

ああ、でもここで、僕の語りは終了？ よって、物語も終焉？

.....

かつとなつてやってしまった。今は反省している。

ああ。僕は手紙を書かなくてはいけない。たくさんの手紙をだ。まずは姉ちゃんに書く。そして、母。部長の家族にも書かなきゃ。そして、あまり仲良くできていなかったけど、クラスの皆にも手紙

を書く。

いまなら、言えるかもしれない。

「部長。もう遅いかもしれませんが、僕は存外あなたのことが嫌いじゃありませんでしたよ。その事を生前にお伝えする事ができなくて残念です」

「ぶはあ！」

息を吹き返した。なんだなんだ。僕の妙な告白がミラクルを引き起こしたのか？ 安っぽいミラクルは正直呼びじゃねえんだよ。

「岩屋君。ベッドに転がされたくらいで私は死んだりしないわよ。ただ息を止めていただけ。私が死んだりしたらそれこそ、破綻よ。おいてけぼりがたくさん増えるわ」

「おいてけぼりってだれですか？」

「キミと読者よ」

「何馬鹿なことをおっしゃるのですか？」

「馬鹿じゃないわ。ゆくゆくはこの事を小説として残していこうと考えているのよ。私はね」

付き合いきれない。

彼女が息を止めていたというなら、二分近くは息を止めていたことになる。酸素をたくさん必要としているらしく、肩で大きく息をしている。

うん。これでは僕が小さい子に無理やり悪戯をしているかのようにとれるな。非常に遺憾だ。

部長の頬は上気、呼吸は荒く、視線は中空を漂わせている。

今の僕たちを客観的にとらえてみよう。

呼吸を乱した男女二人。

かたや、うら若き乙女。しかも、外見は小学生。

かたや、性欲の権化高校男子。

何らかの犯罪的かほりがします。僕だって、かほりを嗅げる。

ベッドに投げ出されて、あお向けから、首を持ち上げる形だった部長が首の力を抜いた。

僕のベッドに部長の髪が扇形に広がりを見せる。なんで、目をつむるのですか？ 観念したわ。みたいな、その態度はやめて下さい。いやいや、これこそ気の迷いだ。僕が妙な雰囲気にもまれているから、こんな考え違いを起こしているんだ。彼女はなにも考えていない。なにも起きていない。ただ、何かが起きていたとしたらそれは僕の頭の中で起きているに違いない。

部屋に静寂が満ちる。

眠たげな眼差しで僕を見つめる部長。視線を外せない僕。

そして、扉が開いた。

いつの間に帰ってきたのだろうか？ 姉ちゃんが視線が固まっている。

家に帰ってきてみたら、弟が自分の友人とベッドの近くで、視線を交錯させていたんだ。そら、固まるだろう。現に本人達は今も固まっている。

「うーん。岩屋君。恥ずかしいところを見られたね。良かったね。今日はお赤飯だあ」

「ちょっと、部長は黙っててください。本当にお願いしますから」
僕の社会的立場を失墜させることなく、安全に立ち回る言い訳というものを三秒で、七十二通り考えたが、すべて却下。とくに四十番目の異世界への扉を探しているという設定はあまりにも痛々しい。僕まで心配される。

「あ、あの。姉ちゃん。少し僕に時間をくれないか」

「お黙り。あなたにはこれ以上亜子ちゃんと乳繰り合う時間なんて与えたりはしないわ。そして、あなたは黙つときなさい。これはお願いじゃないわ。命令よ。」

ねえ、亜子ちゃん？ 弟に何をされたの？

部長は顔を赤らめて、目を背ける。

「そんなこと、いくら子戸葉ちゃんでも……」

「まどろっこしいわ。はやく言いなさい。まだ私はあの一件を許しちゃいないわ。簡潔に、真実を述べなさい」

さもなくば、という省略された言葉が想像できた。部長も恐らく同じだ。

「部屋に入ったら、後ろから抱きかかえられてベッドへといざなわれました！」

そう。と言つて、姉ちゃんは僕を見る。

「異論は？」

「ございません」

間違っちゃいないし。巧みに言葉を使いやがって。

ついてきなさい。という言葉になにも抵抗できずに、しゅしゅと部屋を出て行った。扉を閉めざまに部長に視線を送ったら氣力を失ったかのようにベッドに倒れ込んで寢息を立て始めていた。

そうだ。彼女は昨晚徹夜をしていたらしい。なるほど。

寢不足はいけないよね。僕が不幸になるから。

十五話（後書き）

次の更新は22日22時です。

十六話（前書き）

私は口りばばあろりばばあとかゆってますが。現実を見てます。巨乳もすきです。

十六話

「別にね、お姉ちゃんとしては弟の為にお赤飯を炊くのはやぶさかではないわのよ。だけどねえ…………… ロリコンというのはいささかきついわ。勿論、亜子ちゃんが戸籍上は成人を迎えているのもよくわかってるわよ？ だけど…………… ロリコン。いや、ペドフィリアとまでは言わないわよ。そういう、性的倒錯嗜好というのはいただけないわ。生殖行為というのは知性のある人間にとって、一定の愛情表現の一種だというのは私も重々承知のつもり。やっぱり高校生の身分じゃね、物を贈って、自分自身の気持ちを表現して、好意を示すのは難しいわ。」

だからかしら。ああいう風に愛情を表現したかったんだと思うわ。だけどね。やっぱり大事なことから性急な事態はいけないわ。ええ、絶対にいけないわ。今まであなたが生きてきた時間以上に共に過ごしていくかもしれない相手なのだから。

お互いを大事にしないといけない。お姉ちゃんはそう思います。それなのに。

あんなに……………、息を乱して。とにかく軽々しいことはやめなさい。私が言いたいのはそういうことです」

腕を組んで、優しくに諭すようにしてみたり、次には強い口調で熱烈に語ってみたり、またまた次には顔を赤らめてみたり。姉ちゃんの様子は背伸びしながら大人ぶる子供を思わせたなあ。出ちやいましたよ。詠嘆。

とにかく、言っところ。これで、万事解決。

「僕は巨乳が大好き！」

渾身のシャウトだった。

十六話（後書き）

次の更新は22日23時です。

十七話（前書き）

怖いお姉ちゃんもいいものです。不思議な感じが好きなんです。完全なるオナニー小説です。お楽しみください。

十七話

巨乳宣言の後、僕は丁寧に関時間をかけて姉ちゃんの誤解を少しづつ解いていった。

「ようするに、あんたはロリコンでもペドフィリアでもないのね」という言葉で事態の収拾はついた。この結末に至る時の、姉ちゃんの安堵とも不満ともとれる妙な表情に関しては、あまり考えない。畜生、何が不満なんだよ！

疲れた。寝る。と姉ちゃんに申告して、昼寝の続きをしようと考えてる。

自室では部長が寝てるだろうから、ソファーに寝転がった。姉ちゃんか「亜子ちゃん」の隣で寝ないのかしら？」という、発言は無視して眠った。

夢現の中で、姉ちゃんが台所で立ち働いている音が聞こえた。換気扇の回る音。フライパンの油がはぜる音。何かを焼く音。それらを何かの音としてではなく、ただの音として突然とらえていると音が止んだ。急に寂しくなる。音がしないのが寂しい。不覚にも夢の中で瞳が潤んだ。おいおい、こんなもん見られたら恥ずかしいな。再び音がした。

音の中に、とつとつという足音が遠ざかり、一時するとまた近づく。遠ざかる時は、おいてけぼりにされたかのような不安が心に湧き上がり、近づいてきたときは温かな陽が差したかのように穏やかな気持ちになった。

二度三度。名前が呼ばれた。落ち着いた雰囲気の中にある小鳥のような調子の声は姉だ。僕自身が呼ばれているのだ。という事に気付くのは五度目の時だった。

「あ、起きた」

声で優しく起こすあたり、姉ちゃんは淑女としての素養があるようだ。

「そう、僕は起きた」

「いや、私が起こしたんだから。ご飯できたから、食べよう」
席に座った時に思い出して、時計を見る。

まだ昼過ぎだ。

「姉ちゃん、部長は？ 食べないのかな」

「ああ、亜子ちゃんはまだ眠いらしいから放っておく」

そう。と言葉を残して、目前の献立に視線をやる。

固くなり過ぎない程度に配慮された炒り卵を、柔らかいバターロールに詰め込んだものだ。上には、ケチャップが掛かっている。シンプルが一番。これは上手いのです。隣には牛乳。そして、さらに隣には簡単なサラダがある。

朝食みたいなメニューだ。僕にはバターロールが三つ。姉ちゃんには一つだった。

「姉ちゃん、一つ多いよ」

「いいのよ、これで」

そういうやいなや、姉ちゃんはバターロールを口いっぱい頬張った。

なにか、気に食わないことでもあるのだろうか。世の中には気にくわないことが溢れているものだ。しかし、姉ちゃんの気にくわない事態というのが、もしかして今の僕にあるのか。それは、残念だ。姉ちゃんは卵がたっぷり含まれたバターロールを一口に頬張ったのだから、そのほっぺはとんでもないことになっている。リスの様に膨らんでいる。尖ったものでつついたりしたら、破裂しそうなほどにパンパンだ。つつかないけど。

頬パンパン。鋭き眼光。姉ちゃんはおもむろに両腕を胸の前で組みながら、僕を睨みつける。

何か、訊きたいことがあるけれど、訊こうにもそのタイミングが分からない。と言った様子だ。何かを計りかねているようだ。

僕としては姉ちゃんのそのリス顔は可愛いものがあるから、それを見ながら、バターロールを食べ続ける。

食べる。食べる。食べる。見つめる。また、食べる。食べる。

あ。姉ちゃんが嚥下した。少しずつ食道に通せばいいのに。何を思ったか、まだ十分に咀嚼していない物を嚥下したらしい。僕が見ていてもわかる程に、喉が上下して、必死に食道を通っている。「ぬう！ ああ！」という風にうめき声をもらしながら、食事をしている。急いで傍らの牛乳を飲み、胃袋に運び込まれるバターロールの潤滑油としていた。

対面にいる僕に聞こえるほどに立て続けに喉を鳴らす音が聞こえる。よほど苦しかったのだろうか。大変な面持ちになっている。食事で死ぬとか勘弁して下さい。その間も僕を見つめるのは忘れていないらしい。いや、何がしたいんですか？

「姉ちゃん、そんなに見られると恥ずかしいんだけど」
本当は別に恥ずかしくないけど。

「私は恥ずかしくはないわ」

「なんか、キモイんだけど」

「私はキモくないわ」

どうしようもないね。僕がどう思つかではなくて、彼女がどう思うか、らしい。

「食事をしながらで、いいから。私の話を聞いて」
バターロールが口の中にあつたので、首肯した。

「世の中にはね、かくしておきたいものがたくさんあるの。ベッドの中にあるエロ本とかもその類だと思っわ。だって、あるのは確実なのに、それを暴かないのは人情というものもあるだろうけど、もっと、極論を言えば。それを指摘することで誰も利益を得ないからよ。あんたが私にエロ本の所有を指摘したとしても、ただ気まずいだけでしょうが。なにが言いたいかというと、人はすべてを知らなくても生きていけるってことよ」

どう思っ？ と姉ちゃんが訪ねた。

僕もバカじゃないから姉ちゃんが言わんとしていることは理解している。しかしね、理解してみたら、してみたで、一つわかる。

むっちゃ不愉快。

だけど、姉ちゃんの様子をみてたらそんなこと言えない。今にも泣きそう。僕は何をすべきか。どうりたいのかは想像がつくんだ。しかし、どうしたらいいのかということとはわからない。

「僕もそれにはおおむね同意」

黙っておく訳にもいけないので、話を始めた。もう、口よ好きにうごけ。

「なら」

「でも、気に入らない」

沈黙。

一瞬にして変わる。空気が変わる。姉ちゃんの様子がしおらしいものから、怒りへと変質した。

「私是不機嫌」

「見れば、わかる」

「しかも、超がつく」

「うん、久しぶりにみた」

「何が、私を不機嫌にさせているかわかる？」

「まったくもって想像がおよばないところだよ」

「……そう」

膨らんだ風船が割れたようだった。特別大きな音がした訳じゃないけど、僕の心はすくみあがった。

部屋中に感情が霧散して、姉ちゃん表情は諦観だ。あきらめたんだ。何を諦めたんだろうか。僕は理解しえない。そして、理解しないし、理解したくない。積極的に訊ねようとは思わないし、思えない。すべて受動的だ。僕も姉ちゃんも。相手が訊ねるのを待っている。

ああ、むっちゃ不愉快。

「ごちそうさま。美味しかったよ」

食器を流し台において、部屋に戻った。

十七話（後書き）

次の更新は23日18時です。本日もお付き合いいただきまして、
ありがとうございます。

十八話（前書き）

親しい人を名前で呼ぶというのは大事なことですよね。

十八話

大どんでん返していいよね。という話題を部長としたことがある。

創作物には劇的要素を足すのがちょっとした工夫だ。

ロールプレイングゲームで言うなら、初期の頃から相方として組んできた仲間がラスボスだったりするし、恋愛小説で言うなら、燃え上がるような恋をした男女が実は息別れた弟姉だったなんて話は枚挙にいとまがない。話に何らかの起伏を持たせるためにそのような手法がある。

しかしね。そう言うのは物語の終盤にかけて徐々に明かされるのがよろしいのだよ。

恐らく、ラスボスは部長だろうし。姉ちゃんに至っては息別れたなどというドラマティック要素は皆無である。

まあ。前書きはこれくらいにしようか。これから、前哨戦です。僕の心臓持ってくれたまえ。

僕はノックをした。本来僕の部屋なのだから、ノックをする必要なんてないんだ。だけど、やっぱりねえ。ルールというかなんというか。そう言った、ゴング的な合図がないと締まらないよね。空気が。

ほら、現に今だって、部長であろう何か、部屋でばたばたしている。静まってから、僕は入室。

部長はうつ伏せで転がっている。僕のベッドで。どうしようか。

これは了承のサインですか？

僕はお断りだけど。もっと、胸が大きくなってから誘いなさい。

怖くて言えない。心の声。

彼女は狸寝入りをかましている。あの騒音をたてておいて、まだ寝た振りをしようという部長の心意気に強い感銘を受けたので、そのまま無視。デスクトップの前にある木製の椅子に腰かけて、写真

の整理を始めた。

一枚一枚写真を見ていく。実際僕としては写真とかは門外漢なので、良し悪しという物が想像つかない。すべからく素人が撮った僕の写真なんて、鑑賞に堪えない代物ばかりだろう。

よくわからなかったんで、すべてのデータを黒光りするUSBに入れた。

今日撮った写真をスライド形式にしてみた。撮った順番に写真が表示されるのだ。

順繰りに表示される写真をボウっとした様子で眺めながら、声に出して訊いてみた。

「ラスボスって部長なんでしょうね」

後ろのベッドでもそもそと動く音がした。そのまま、ベッドに顔を押しつけたまま返事が聞こえた。

「さあね」

「寝た振りはもういいんですか？」

「ツツコミしてくれないから、もうやめた」

「あれはツツコミ待ちだったんですか。何とも分かりにくいボケをしてくれますね」

「岩屋君さ、もしかして機嫌悪い？」

「どうしてですか？」

「なんか、刺々しい」

「気のせいですよ」

本当はわかってる癖にな。白々しい。このラスボスがあ。

部長はベッドから降りて、僕の隣においてあったデジカメを手にとって、またベッドヘスプリングの音をきしませながら戻った。巣穴に引つ込む小動物みたいだ。

「違う話をしてもいい？」

「どうぞ」

「なんで昔みたいに、私のことを名前で呼んでくれないの」

「逆に聞くなれば、なんで部長は僕のことを名字で呼ぶようになった

「たんですか」

「それは、岩屋君が呼び方を変えたからよ」

「ああ、そうだったんですか。気づきませんでした」

「気づいていたけど。」

「あれですね。僕が呼び方を変えた理由はですね。変化が欲しかったんですよ」

「変化？」

「そうです。変化。変容。チェンジ。そういった諸々がほしかったんです。部長は欲しくないんですか？」

「私は……………どうだろう？」

「欲しくないわけじゃないか。悲しくならないのか。いつまでたってもその成長しない身体を抱えたまま生きるのは。僕は耐えられないけどね。」

「とにかく、僕は変化が欲しかったです。僕は文芸部に入部することを決意させられたあの瞬間から、あなたに敬語を使うことを決めまし、何が何でも部長と呼びましょう」

「私はさ。いつになったら、岩屋君を名前で呼べるようになるのかしら」

「それはあれですね。僕が文芸部を辞めた時か、高校を卒業した時です」

「何それ。ひどくない」

「全然これっぽっちもひどいとは思わないです」

「岩屋君は勘違いしてる。それはそれは大きな勘違い。私という人間は確かにちよつと正常とは言い難い人間だわ。身体の成長は一切見られない。衰えも感じない。強くなった気もしない。常に一定。何も変わらない。だけど、私の周囲は変わっているわ。現に岩屋君の身長はぐんぐん伸びてる。いつだったかしら、私と子戸葉ちゃんの背を追い抜いた時の君の誇らしげな顔を今でも思い出せるわ。変化は何も私の体の成長だけで感じられない。常に誰かが隣にいないと変化は実感できないのよ。私は十全に変化を楽しんでる」

うおお。何ですか？ いきなりクライマックスですか？ いや、
まだだ。まだだよ。まだ終わらせない。だって、まだやりたいこと
の半分も進んでいないんだ。こんなところで幕を引かせてたまるか。
満足したらいけない。そこで止まる。

満足するな。絶対にいけない。

不満を持つとう。

現状に不満を持つとう。

探せ。

現状に対する最善を探せ。ないなら、作れ。

僕は強い怒りを持っている。そして、困惑だ。僕が撮った写真。

スライドショーはもう、既に三週目だ。

一度として見ていない。

僕は最後の写真をみていない。

「部長。何かパソコンいじりましたか？」

「うん。あれよ。エロゲをインストールした」

しらばつくれるか。空とぼけた声だすな。毎週殺人が起きてしま
うアニメの主人公みたいな白々しさだ。ちなみにエロゲは後からプ
レイします。

「部長。カメラを返してください。今すぐに」

「なんで？」

「悪い予感がします」

「そう。んじゃ、返すわ」

案外あっさり返してくれた。なんだなんだ。僕の焦りは勘違いか？

ああ。やられた。足りない。いろいろ足りない。

「部長はゲーム好きですよね」

「ええ。かなりやる方よ」

「そうですね。僕も良く知っています。そして、ゲームに必要な物
ってなんでしょうか」

「それは、情熱よ」

「いえ。必要なのは記録媒体です」

「ああ、盲点」

「メモリー返して下さい」

「オーケー。返そうね」

そう言って、部長は「えい！」と、何かの破碎音をさせて、僕の机に記録媒体だった物を返した。

「部長」

「ごめんちゃい。私。ドジっ子。許して」

なんで片言なんだよ。そこまでする部長の動機がわからない。

これって、姉ちゃんの私物だぞ。僕のせいじゃないからな。しかし、謝るのは僕なのだろうな。しかも、あんなことを言った後だ。何とも気まずい。

僕はなんで、部長がデータを破損したかは訊いたりもしない。絶対に訊かない。

「僕はやさしいです。部長がどうしてもそんなことをしているのなんて、問いません」

「ありがとう」

「今から、出かけましょう」

ぽかんとした様子で部長が僕を見つめる。

「データ？」

「似たようなものかもしれませんが。今から、電器屋に行きます。勿論、料金は部長が払ってくださいね」

「……………」

「どうしたんですか」

「岩屋君さ。案外ヘタレじゃないんだね。知らなかった」

「これも変化の一つと言えるでしょう」

小さい子に金をせびりつつしているかのように見えてしまうことは非常に遺憾だ。

僕と部長は近所の電器屋へと向かった。

十九話（前書き）

歩幅を合わせるといふのは心を合わせるみたいなものかと思ひます。

十九話

日は中天を過ぎて、次の日の朝に備える為に東へと落ちていく。だけど、日差しは強かった。

「バスで行きますか。歩きますか」

「そんなに急ぎの用事でもないのだから、ゆっくりしましょう」

そういうと、部長はすたすたと歩き始めた。しかし、すぐにその歩みに僕は追いついて、先を歩くようになった。僕の一步は部長の一步半のようで、僕が二歩歩くと、部長の足音が三歩した。

散歩の時間。

僕という人間性は少々社交性に欠ける。これってというのは成長における影響ではないのかもしれない。これはもう、一種の病気だと思う。本当に。学校が始まって、一ヶ月が経った今でも、クラスの人に話しかけられるとびくついてしまうし、僕自身クラスの人に話しかける必要性がある時は手に妙な汗がでてる。極力、そういった雑務に関わりを持ちたくないと考えていたら、さらに社交性をなくしていった。

そうしたら、必然的に僕は内に閉じこもるしかない訳で、その内側に待ちかまえているのは姉ちゃんとか部長しかいないワケデ、しかもなんだかんだ言って、二人はやさしいワケデ、僕はそれから離れられナイワケデ、僕には閉鎖的な人間関係にとどまってしまう井の中の蛙状態ニナルワケデ、僕は底の浅い人間になってしまワケデスヨ。もうやだ。頭がいたくなる。

そう言った状態は僕としてはやはり遺憾に思う。だから、友達が少ない僕は友達をつくらうかと思う。

そうしたら、万事上手く行くんじゃないかな。いかんせん僕という人間には深くつきあった交友関係というものがないから。周りの人達のように友達というのに囲まれて、生活していたら人並みみたいになるのかな。だけど、今更僕が社交性というものを獲得すると

いうことができるのだろうか。

などと、取り留めのないことをつらつらと考えていたら、いつの間にか歩調が崩れていた。部長は遠く離れたところにいた。ぼくの進路方向に向かってきているので、僕がはやく歩きすぎただけだ。

.....

昔は僕が部長や姉に手をひかれて、歩いていた覚えがある。あの頃は、僕は姉ちゃん達を見上げていた。あの人は僕を見下ろしていた。

これだ。このことを言っていたんだな。これは確かに変化だ。大きな変化だ。何も変わっていないことはないじゃないか。確実に変わっているじゃないか。

しかしね。ここで、僕はあえて逆接を使用する。

察しの良い方はもうお気づきかもしれない。僕の周りを取りまく人間達は明らかな矛盾を抱えている。だれもそれを指摘しないけど、まさかわかっていないなんてことはないだろうさ。

ほら、僕たちは臆病だから。

部長のスニーカーの音。軽快でいて、今にも空を飛べそうな程の躍動感を持っている。

部長もつと、すたすた歩いてください。なんてことを僕は言わない。言えない。洒落になんねえし。身体的特徴を揶揄して楽しむ人間はすべからず死ねばいい。これはまじ。冗談じゃない。胸は良いんだよ。僕の場合。大きい方が好みというだけで、小さい胸も嫌じゃないから。だから、ノーカン。自分ルール発動。

「部長。すみません。少し速かったですね」

「まったくよ。もうあり得ないくらいはやいわ。あんなに早いなんて考えられない。というかね、なんでもかんでも自分が楽しめればいいって魂胆がどうかとおもうわ。そんな風に一人でいつちゃって楽しいの？ 私は楽しくないわ」

「元気そうですね。もっと、速く歩きましょうか」

なんだよ。シリアス大事なのによ。僕、一生懸命青臭いこと考え

ていたんだぞ。格好悪いけど、真摯に物事に向き合おうとする若者らしい考えを披露していたのに、下ネタですか。ごちそうさまでした。

近所の電器屋で目当ての物を購入して、後は帰る段となった時は、家を出てから一時間くらいだった。

「部長、僕ちよつと寄りたいところあるんですけど、ついてきますか？」

「エッチいのはNGの方向で」

「そうですか。さようなら」

「うそよ。ついて行く。ところで、本当にエッチいものなの？」

「いや、ただの本屋ですよ」

十九話（後書き）

次の更新は20時です。

二十話（前書き）

作家を志す人間は己のバイブルがあると思います。そして、それがこの家族は岩在英道だったということなのでしょう。

二十話

本好きの人間ならば、わかっていただけるだろう。特に目的もなく、本屋に向かうのは習性としか言いようがない。虫で言うところの正の光習性だろう。あえて、何か言うなれば正の本屋習性。

理解しがたいなら、周囲の読書家に訊ねてみよう。異性であれば、尚よろしい。読書好きなあの人と距離を縮めるチャンスだ。新しい何かが始まるかも。

僕も部長も曲がりなりにも文芸部に所属しているわけなので、本は嫌いじゃない。むしろ好きだ。活字の魅力やばい。もう、メロメロ。

広いフロアを贅沢に使用した、清潔感溢れる大型書店も悪くはないが、狭い面積を有効活用せんと必死の努力がうかがえる小さな店構えの方も好感が持てる。天井を貫かんばかりに並べられた古本の数々は僕を充足させる。本に囲まれている感じがたまらない。すげえ、興奮してきた。

気分的に今日は大型書店より、古本屋へと向かいたい気分だったので、古本屋に向かった。

開け放された扉をくぐると、大量の本棚が僕達を迎えてくれた。

僕は僕の興味のある棚へと、向かい。部長は部長の興味のある棚へと向かう。

何を買いたいというわけではないけど、こういう時は自分が好きな作家さんの本を探してみたりするものだ。

なんととはなしに、あの作家を探してみる。

か行の最後のあたり。

岩在英道。なんとなく、僕の名字の岩屋に似ているように感じるから、妙なシンパシー。

異常があつた。

岩在英道の作品は基本的に古本にでることはない。理由は熱狂的

なファンが彼の本をほとんど手放したりしないのだ。

古本屋で見かけるのは稀なことだ。そして、今日は稀な日らしい。

一つの本棚がすべて、岩在英道で埋まっていた。

二十話（後書き）

次の更新は21時です。

二十一話（前書き）

女の子をだっこのできるような生活がしたいです。

二十一話

不可解な事象にはなにかの作為があるものと考えていいらしい。
と何かの本で読んだ。ん？ 岩在英道だっけ？

いやまあ、それはどうでもいいわけで。この事象は明らかに不自然だと僕は思う。ラスボスの企みでもあるのだろうか。

もしかしたら、これが僕の計り知れない範囲のことという可能性もなきにしもあらず。ということを考えてみる。無知の知だっけか。ソクラテスさんをリスペクト。世の中には知らないことの方が多いと言うことを僕は知っています。ていうか、今日の午後にそれを実感したし。

「不自然ね」

おお、部長もお墨付きの不自然！ 僕一人ではなんだか、不安だけれど心強い。

「岩在英道の蒐集家が本棚の整理でもしたんですかね？」

「なんでよ？」

「それは……ほら、春だから」

「訳わかんない」

「すみません、僕もよく訳わかりません」

なんか、意味深な言葉をはきたかっただけなんだ。

「何で、そんな前後不覚みたいなのバカな事するのよ」

「いやあ、春だから」

「……………」

おお、すごいぞこの口癖。部長を困惑させている。目の色が怒りから、不安になっている。

ちよつと、優越感。

僕がふふんと笑うと、鳩が豆鉄砲食らったかのような顔してる。

爆笑。心の中で。性格には一人だから、爆笑じゃないんだけど。

あれ？

「部長。どうしてここにいますか？」

娯楽小説コーナーはこっちゃじゃないぞ。

「私を娯楽書籍コーナーで抱いてほしいの」

んだ、こら。性の娯楽ですか。勘弁してくださいよ。上手くないから。

「なんとも、魅力的なお誘いですね」

胸があれば、とびついたらどうになあ。出ましたよ。半実仮想。

最近の僕は古典に通じているわけでもないのに。不思議なものだ。

「何？ その手は飾りなのかしら。その手の役目を十全に果たしなさいよ」

「もう、たまりません。僕は我慢できませんよ。もういいんですね、わかりました」

もう辛抱タマらんですたい！ とか言つて、何とか三世の様に飛びこむことができたなら、それはそれで面白いのだらうけれど、そんな脚力は持ちえないので、落ち着いて、冷静になつてみる。

部長と共に娯楽書籍コーナーへと向かった。

部長は周りに人目がないのを確認して、僕に腕を掲げた。それは幼い子が親に抱っこをせがむような仕草だ。

「部長、カメラがありますよ」

「人じゃなかったらいいわ。視線を感じるのがいやなのよ」

カメラ越しなら見られてもかまわないってか？ ちょっと、変態はいつてるな。あんまり近づかないようにしとこう。

僕は部長の脇に手を入れて、持ち上げた。部長は宙づりになるような形で僕と向かいあう。

「岩屋君。君ね、私と向かい合う形じゃなくて、本棚の方に向かせなさいよ」

そうだ。彼女は僕を使つて、棚の上段の本を探そうとしているのだ。部長や、姉ちゃんと本屋に行く時はそのようなことを頼まれることが多々ある。

部長は僕に抱きあげられている様を誰かに見られるのは気に食わ

ないらしく、いつも周囲への視線の気の配り方は尋常ならざるものをうかがえる。やはり、抱きかかえられている姿というのは恥ずかしいのだろう。実を言つと、僕も恥ずかしい。

二十一話（後書き）

次の更新は、明日の三時です。

二十二話（前書き）

自分が大好きな小説がまとめて売られてたら、少し悲しい気持ちになりますな。

二十二話

店内の万引き防止のための定点カメラが僕の痴態を余すところなく、撮影している。恥ずかしくて、顔面が紅潮しているのがわかる。これでははたから見たら、小さい子を抱き上げて、興奮している危ない高校生になってしまう。

社会的ピンチ。

「部長、早くしてくださいよ」

「……………」

おいおい。

だんまりですか？ まずいよ。そんなことじゃあ。親御さんに連絡しないといけないよあ。連絡先教えてもらえるかなあ。それなら学校でもいいかなあ。君、それ北高の制服でしょう？ まあ、とにかく連絡するから。しかし、君もなかなか早まったことしたねえ。まだ十五だよねえ。その年で性犯罪は珍しくもないけどね。相手が十歳じゃあねえ。社会的にもつらいかなあ。

は！ まずい。どこかにトリップしてた。未来にトリップしたのか？ てことは、あれは確定事象なのか！ まずい。早急に何とかしないと。

とにかく、おろそう。

すとん。という擬音が疑問にならない程の優雅さで着地。

部長の長髪が風に舞い上がるように広がる。なんていうのかな。

女の子の香りってようするにシャンプーの香りだね。かんきつ系の香りでした。よって、部長はみかんだ。

食べちゃうぞあ。

……ふう。なんだか、最近の僕は疲れているみたいだな。

「岩屋君、君の手つきは厭らしかったわ。なんで、あんなに手がプルプルしてるのよ。そして、今の顔つきもどことなく厭らしいし。どことなく捕食される側の感覚にあるわ」

何気に鋭い。

前者はことごとく外れてるが、後者が当たっているから何とも言いつらい。だけど、大人への道のりというのは平然と嘘をつく技術だと考える。これは一種の処世術だよね。

「何をおっしゃいますか、部長。この僕が旧知の間柄にあるあなたにそのようないやしい劣状を抱くとは思いですか？」

「思ってる。だって、思春期だものね。私もあなたくらいの年ごろの時はエロの塊だったわ。旧知の間柄、というシチュエーションもたまらないものがあるわ。そして、今、君が窮地に立たされているのもそこはかたない好奇の視線でもって楽しんでるの」

いやな告白きかされた。

なんちゅうこったい。てことは、僕が小学生で鼻水たらして遊んでいる時期にこの人はエロいことで、頭がいっぱいだったのか。うん。それはそれでねえ？ いいものだ。

胸がないのがことごとく残念だが。

「ほら、今、失礼なこと考えたわね」

「口に出さなければ、セクハラじゃないですね」

「……そうね。ところでね、岩屋君あなた筋トレでもしときなさい」「唐突ですね。なぜ筋トレなんですか？」

「私を抱き上げる時に、腕プルプルしてたじゃないの。貧弱にも程があるわ」

「ああ。僕は根っからの貧弱系男子なんで」

「大丈夫。トレーニングすればすぐに何とかなるわ。私もあなたを持てるもの」

それは部長の生涯をかけて、付き合う障害の一部だ。誇らしげにするんじゃない。僕ががんばっても追いつけない領域にいる人間が言っただけいいセリフじゃない。

「まあ、雑談はこれぐらいにしといて、今日はすごい日ね」

「ええ、そうですね」

僕も相槌を打って、娯楽小説の棚を眺める。岩在英道は基本的に

娯楽書籍——いわゆるライトノベルと言われるジャンルも含めて——の絶対数が少ない。

詳細な理由はわからない。

彼の文体が娯楽書籍に限って言えば、あまり見られない文体だからだろうか。いや、そういうならば、そこまで特異な文体と言うことも言えない。彼は様々な文体を使い分けることができるのだ。甘ったるい言葉を並べたてることによって、読者を陶酔の渦に放りだしたりするし、峻烈な文章を並べて、緊迫したシーンを形づくることもあるし、異常と言えるほどに段落を減らして、紙を黒の文字で埋め尽くしてみたり、かと思えば、色を変えて段落を多く取って、目に優しい文体にしてみたり等々硬軟織り交ぜた様々な手法を取り入れるのが、岩在英道なのだ。それを根強く支持するファンがいるからこそ、彼の人気の理由の一つと言えるのかもしれない。

そんな岩在英道が書いたと言うライトノベルの存在は耳にした覚えがあるが、率先して探そうと思うようなものでもなかったので、正式なタイトルまでは覚えていない。

確か、あるレベルで一つのシリーズを書いていた。気がする。ネットって便利だ。

一つのタイトルにつき、五冊程並んでいる。全てを確認することはなかったが、すべて初版本だった。コレクターであるなら、舌舐めずりするような代物だろう。なんで、これらの本を手放したというのだろうか。不思議だ。

二十二話（後書き）

今日の更新は以上でございます。おつきあいいただきまして、ありがとうございます。

二十三話（前書き）

みなさまお久しぶりです。更新を行います。リピーターの方はいるのでしょうかね。いると信じて、更新を行います。次の更新は明日とします。師走に向かって爆走中のしいじいでございます。

二十三話

僕は家の書斎にない本を、頭の中でリストアップして一冊ずつ手持ちのカゴに放り込む。

気がつけば、カゴを持つのも苦労するほどの重量になっていた。

「ねえ、岩屋君。貧弱系男子じゃなかったの？」

「本に関しては別筋肉が働きます」

僕があらかたカゴに入れると、うずうずした様子で僕を催促する部長。

「どうしたんですか？」

「言わなくてもわかつているでしょう？」

「ああ、次の本屋に行きたいんですね。わかりました。すぐにでもレジを済ませてきますよ。待ってて下さいね」

メキッ！ という音がした。部長が持っているカゴの取っ手が圧倒的な圧力でもって、哀れひしゃげていた。

「すみません。からかいました」

「抱っこして」

抱っこをせがむ子供みたいな格好で僕を睨む部長。

部長は僕に抱えられながら、器用に本を選びとっていく。

「一つのタイトルにつき、二冊も本を買うのは何ですか？」

「閲覧用と書き込み用の二冊」

へえ。

「部長は、岩在英道の本に書き込みをしているのですね」

「まあね。気になる作家さんの作品は一応二冊買って、色々落書きしているわ」

もうそろそろ、根性という二文字では誤魔化するのが難しい程に二の腕に乳酸菌が溜まってきた。

「うん。よろしい。おろしてちょうだい」

と指示を受けた。僕はこれ幸いとおろして、二人でレジへと向か

った。

レジ打ちの店員さんはアルバイトの方なのだろう。アルバイト歴は長いようで、流れるようにレジ打ちをこなしている。

店員さんは女性の方で、肩まで伸びる髪をライトブラウンに染め上げている。クラス内にいたら、お近づきになるのを躊躇してしまうような雰囲気的女性だ。僕としては、こういう雰囲気的女性に關して苦手意識をもっている。しかし、それらを払しょくしてしまうほどに見事な接客だった。

僕と部長が並ぶと、顔の似ていない兄妹に見られることが多々ある。ある程度、見識のある地元民は部長や、姉を含めた障がい者に理解がある。理解のある人は、部長の外見年齢に惑わされることなく、懇切丁寧な接客をしてくれる。

そういった、配慮を受けた時の部長の顔の緩み具合つたらない。部長達のコンプレックスは多少の充足を覚えるらしい。

誇らしげに胸を張っている。そんな風にしたら、ガキに見えますよ部長。とか言いたかったが、そんなことを言うと、結局のところガキに見えてしまうので、何も言わない。

部長のレジが終了して、「お待たせしました」とお決まりの言葉、だけど心のこもった声音で僕にレジスターの前に来るように促してくれた。

本を値段ごとに並べて、手際良くレジをこなして行く店員。胸は普通。べつに、残念じゃない。そこまで好みじゃないから。むしろ気持ち良いね。彼女の接客最高。

僕が端数をそろえることができなかったので、お釣りを求めた。彼女がお釣りを用意して、小銭を僕に渡そうとした時だった。

相手の目を見てお釣りを渡すという習慣が彼女にはあるのかもしれない。目があつた時は対人スキルという物が少ない僕には大変気まずいものがあるのだ。しかし、彼女程の方ともなれば、僕みたいな気弱な学生を相手に、視線で負けることはないだろう。いやね、ほら、僕はクラスでも太鼓判を押される位の気弱君だしね。

固まった。硬直した。彼女は硬直した。何だい？ 僕に一目ぼれ？ 困ったなあ。僕には将来を誓い合った女性がどこに在る気がするんだが。いないな。勘違い。

こんな妄言を頭の中で繰り広げている間も、彼女は見つめてくる。ライトブラウンの髪の間隙から僕を凝視する。僕としてはその視線をそらすことができないで、視線を返す。なんとというか、驚いた時って硬直するよね。ここで、さわやかな笑みでも返せたら僕の人生もうちょっと違つかもしれない。試しにさわやかな笑みを返してみた。何も返ってこない。悲しい。ちよつと、恥ずかしいわ。

「お客様」

と、店員さんが声をかけた。

「何ですか？」

「以前こちらで、これらの本を買い取らせていただいた方ですよ？ そのまま料金を頂いたのでは心苦しいので、これらの本に關しましては買い取り時の金額で清算させてください」

はん？ 僕は本を買い取ってもらった覚えはない。一体誰と見間違えているのだろうか。僕としては、この申し出は願ってもないものだったが、悪いことなんてできようはずもない。だって、隣に部長いるし。

「それはいつのことでしょうか？」

「三日前の昼ごろではなかったでしょうか。私が接客させて頂きました」

「なにかの勘違いでしょう。至極真面目に学校に通う、僕が平日の昼間にそのようなことができるはずありません」

店員さんは狐につままれたかの様な顔をして、僕と部長を店内から見送ってくれた。

部長は幾分不機嫌だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6770y/>

部長も僕も嘘つきな小説

2011年11月29日21時54分発行